

播磨聖人亀山雲平の功績と人柄
—その今日的意義について—

中嶋 裕子・中島 友子
(福山平成大学) (神戸医療福祉大学)

Achievements and Life of Saint Harima, Kameyama
Unpei
—His Significance Today—

NAKAJIMA Hiroko and NAKASHIMA Tomoko
(Fukuyama Heisei University) (Kobe University of Welfare)

神戸医療福祉大学紀要 第15巻 第1号
(平成26年12月)

< 総説 >

播磨聖人亀山雲平の功績と人柄
— その今日的意義について —

中嶋 裕子¹⁾・中島 友子²⁾

Achievements and Life of Saint Harima, Kameyama Unpei
— His Significance Today —

Nakajima Hiroko¹⁾・Nakashima Tomoko²⁾

Kameyama Unpei (1822-1899) lived from the end of the Edo period to the middle of the Meiji era, when Japan was in great upheaval. He was called Saint Harima. He had a profound effect on those who around him. The monument in Setsu Kameyama's memory, which was erected by his followers 16 years after his death, shows their devotion to him. However, these days, very few people know his achievements.

In this paper, we examine his life and achievements dividing his life into three stages: first his early days, secondly his time as a "Daikansatsu" of the Himeji clan, finally his period as an educator and a guardian in Shirahama. In addition, we examine his significance to us people living today.

In his early days, he studied hard to serve the public. He used his learning and cultivated wisdom for the difficult times in which he lived. As a devoted clan man, he remained faithful to the lords and people of the Himeji clan. At the time of the "Katsushi no Goku" incident, he made the right judgment and saved people. He succeeded in a bloodless surrender in 1868, though it was a painful decision. He saved many people from violence. In his later days he devoted to education and mentored talented people who served the nation in their own fields. He was a man of virtue and justice.

Our research concludes that he should be remembered and learning Unpei's life still teaches us lessons, even today.

Key words : Saint, Echoes from History, History in Himeji

聖人、つながる命、郷土の歴史

はじめに

地域の教育力の向上、郷土への愛着の形成の重要性が指摘されて久しい。姫路市では地域の活性化とすみよい街づくりを目指して2004年以降、中学校区単位で歴史、文化、自

然などを再評価する地域夢プランを実施してきた。現在までに累計140団体のプログラムが支援を受けた。その採択プランのひとつに姫路の偉人亀山雲平を顕彰した『播磨聖人 姫路三山亀山雲平』がある。

亀山雲平 (1822~1899) は、幕末、明治の

1) 福山平成大学 (Fukuyama Heisei University) 〒720-0001 広島県福山市御幸町上岩成正戸117-1

2) 神戸医療福祉大学 (Kobe University of Welfare) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

動乱期に姫路藩士として姫路藩を支え、晩年は教育者として播磨の地に大きな功績を残し、播磨聖人として仰がれた人物である。しかし現在では地元においても雲平の功績は言うに及ばず名すら知る人が少なくなっている。時代が変化していく中で亀山雲平が顕彰される意義は何であるのか。

本稿では雲平の人生を3期に分けて検証し、亀山雲平の功績と顕彰意義について考察したい。

1. 亀山雲平を顕彰する『播磨聖人 姫路三山亀山雲平』

『播磨聖人 姫路三山亀山雲平』は2013年度八木地区地域夢プラン展開事業として採択され、出版された冊子である。発起人である宮脇武義氏は、「はじめに」において雲平を顕彰する必要性として次のように述べている。

「姫路藩の重職に就き、勤皇志士が処刑された甲子の獄において正義を貫いた人物であり、姫路城無血開城のため、隣藩との交渉に身を賭して取り組んだ武士でもあります。亀山雲平を姫路市民の共通した財産として、継承していくべきでしょう」

『播磨聖人 姫路三山亀山雲平』には雲平の生涯や、昌平坂学問所（昌平黌）の学友・同窓生、書籍、姫路城開城の詩、書や書簡、雲平歿百年式年祭行事などが紹介・記載されている。

2. 雲平の功績

幕末から明治は封建社会から近代社会への過渡期であり日本人の価値観が崩壊・変容していく激動の時代であった。その激動の時代を生き抜いた播磨聖人、雲平の業績と人柄を

1) 大儒学者の基礎を築いた修学時代、2)

激動期の姫路藩大目付時代、3) 教育者としての人材養成、地域貢献時代と3期に分けて考察したい。

1) 大儒学者の基礎を築いた修学時代

姫山の東方五軒邸で1822年（文政5年）1月20日、代々姫路藩士であった亀山家の次男として、父百之と母頼家の間に恭吉（後の雲平）が誕生した。

亀山家は儒者の家系であり、雲平は幼少期より父百之の指導の元で勉学に精を出した。雲平10歳時に父を失うが、その遺志を継ぎさらに学問に励み、18歳にして藩学（好古堂）の授読（助教授）に抜擢された。22歳の時、兄剛毅が24歳で早逝し、亀山家の当主となった後も学問に心血をそそぎ、姫路藩主から好古堂での勤務精励を称えられ、金五両を授けられた。

幕政の膠着状態を打破すべく、幕府は諸藩の優秀な人材を昌平黌で学ばせ、その糸口を探ろうとしていた。1850年（嘉永3年）、姫路藩に選抜された雲平（29歳）は昌平黌で日本有数の大学者佐藤一斎のもとで学問を修めた。昌平黌では唯一、皇清経解千数百部を習得し、名実共に大儒学者となっていた。明治政府による治国後、私学校を設立して学聖、賢人と称される教育者、学者となった素地はこの昌平黌時代に培われたのであろう。

同じ頃昌平黌に学んだ学友らは、明治の世になり、政治家や学者として近代国家の基礎を築いた。

2) 激動期の姫路藩大目付時代

昌平黌で学んだ後、5代目藩主酒井忠学の授読となった。その後、雲平は6代目藩主緝光公酒井忠宝、（1829～1853年）、7代目藩主顕徳公酒井忠顕（1836～1860）、8代目藩主閑亭公酒井忠績（1827～1895）、9代目藩主

楽堂公酒井忠惇（1839～1907）、10代目藩主裕齋公酒井忠邦（1854～1879）と歴代の姫路藩主に仕えた。

当時の姫路藩は、家老河合隼之助道臣（寸翁）（1767～1824）の藩政改革後、尊王攘夷の思想家が多くみられるなど時代を先取りする自由な学問的風土が育っていた。しかし8代目藩主忠績の就任後、姫路藩の気風が変化した。酒井家は徳川家と血縁関係があり、関が原の戦い以前より徳川家の家臣として仕えていた譜代大名であったが、特に忠績は徳川家との主従関係を重んじていたためである。そしてその後の姫路藩の佐幕派の立場を決定付けたのは、1864年に起こった甲子の獄であった。

(1) 甲子の獄における英断

江戸では、尊王攘夷運動を巡って安政の大獄、桜田門外の変など佐幕派と尊王派の対立が激しさを増していたが、姫路藩も例外ではなかった。その対立に終止符を打つべく下された処分が甲子の獄であった。1864年（元治元年）、家老高洲隼人広正が、京都などで相次いだ佐幕派要人の暗殺に関与したとして、姫路藩士ら70人以上を裁いたのである。尊王攘夷派のリーダー格河合惣兵衛（1816～1864）は自害、脱藩を企てた養子の伝十郎も死罪となり、その他捕えられた藩士らにも自刃、斬首、永牢などの厳しい処分が下された。この時雲平は大目付として深く関わっていた（雲平43歳）。

亀山茂理編『遺芳纂録』によれば、雲平は全員死罪にすべしとの場にあつて「罪ノ軽重ヲ論ゼズシテ刑ニ処スルハ妥当ナラズ、况親シク手下下サザリシモノモ、齊シク死刑ニ処スルハ如何－先生、正ヲ守リテ動かズ、侃侃諤諤トシテ、論争セラレタレバ、有司モ遂ニ其言ニ伏シタリ」とある。雲平は、佐幕派の立場と目されなが

らも、尊王派にも理解を持ち、全員死罪とする場の雰囲気にも妥協することなく罪の軽重を明らかにするという立場を貫き、常に正道を模索したのであった。当時において雲平の主張はかなり先進的なものであり、雲平の人格と学識がよく表れている。

甲子の獄がきっかけとなり、姫路藩では保守佐幕派が藩論を掌握するようになった。藩主忠績は、翌年1865年に江戸幕府最後の大老に就任し、姫路藩は幕府を支える中心的な藩となった。

(2) 姫路城を無血開城に導く

時代は動き、1867年大政奉還が行われた。同年忠績の隠居により姫路藩主となった忠惇（29歳）は、諸大名が国許に帰り状況をうかがって動きをみせない中、慶喜の呼びかけに応え上京した。その忠義により老中上座に任命され、姫路藩は譜代筆頭藩となった。

翌年、1868年（明治元年）1月3日に鳥羽伏見の戦いが始まったが、3日で幕府軍は大敗を喫し雲平の長男亀山丈助方正も惨敗し帰還した。将軍慶喜は江戸に逃れ、忠惇も同行した。

1月10日には将軍慶喜と徳川側諸藩の討伐命令が下り、朝敵となった姫路藩は岡山池田藩（備前藩）の攻撃を受けるに至った。留守を預かる重臣たちは戦鬪か降伏かの苦渋の選択を迫られた。緊迫した数度の交渉後、藩主の不戦の命を守り、降伏、無血開城の約束を交わした。

しかし1月16日、備前・長州藩が締結した平和的解決を破棄して姫路城を攻撃した。大目付である雲平と齊藤鑑介は砲弾の飛び交う中、敵陣に乗り込み大将池田図書助と談判し、雲平も景福寺に捕われの身となりながらも攻撃を中止させた。翌日の無血開城により、多くの藩士、領民の命が救われ、城も領土も戦禍を免れたのであった。

(3) 姫路藩と民の救済

降伏後も、姫路藩は朝敵とみなされ、領地をいったん朝廷に預け謝罪に誠意がなければ没収するという「朝敵罪第3号」の処分を示された。新政府の樹立後、各地で家名の断絶、領地の没収が行われており、その事態を回避するためには、藩主もしくはそれに代わる者が上京し謝罪し、新政府への恭順の姿勢を一刻も早く示す必要があった。雲平ら重臣が前藩主忠績の説得のため上京するも忠績は朝廷への謝罪を拒否した。そのため重臣たちは謹慎中の忠悃に代わる新しい藩主をたてて救済の道を探った。

雲平は、謝罪のため新しい藩主となる幼い酒井直之助（後の忠邦）を護り、江戸から雪深い中仙道を進み（官軍江戸攻めのため東海道を歩めず）やっとの思いで京に到着したが、入京は許されず、危険な道中を警護にあたりながら帰藩することとなった。その後も新政府への恭順を示すため15万両の軍資金の献納を申し出、人事の刷新を図って新生姫路藩を示した。

5月13日、藩政改革と度重なる嘆願書（忠績の名で家臣が提出）が朝廷に受領され、勤皇の志を厚く相立てる誓約書をもって、姫路藩は救済されることとなり、5月20日に本領安堵と家名存続の沙汰が下りた。雲平は、手記『慶雲日録』に

「右五月十三日源五右衛門儀御役免、(中略)去廿日朝廷より本領安堵の御沙汰出て候事其の委細御布告書等は御布令録に出る也、余の名此の巻以って慶雲二字偶然の事といえとも其の維持宗社実に慶雲の祥の如く也」

と自己の失脚（御役免）を嘆くことなく本領安堵と家名存続の安堵と喜びを記している。

(4) 雲平の失脚（戊辰の獄）

新生姫路藩となった後も藩内では尊王派と佐幕派の対立が続いていたが、根強く残って

いた佐幕派排除のため、8月、11月、翌年2月と、旧幕府派の家臣の死罪、永牢、家名断絶などの厳しい処罰が行われた。戊辰の獄である。

備前藩との応接を重ね無血開城へと導き、家名存続に筆舌に尽くしがたい苦労を重ねた雲平も中小姓組頭（下級武士）に降格され、雲平への信頼が厚く、雲平と行動をともにした重臣松平孫三郎も家禄没収・終身禁錮と厳しく処罰された。こうして戊辰の獄後、上層部の佐幕派勢力は一掃されたのである。

大儒学者として全国に名が知れていた雲平であったが病になり職を辞した後、政治の世界に戻ることはなかった。公に命を賭した数多くの犠牲の上にある新政府に仕えることはできなかったのであろう。また、代々姫路藩士の家生まれ、歴代の若い姫路藩主に仕えた雲平は節操を守ったのであろうと思われる。

幕末の混乱期、姫路城を無血開城とし、主君、家名を守り、藩士と領民を守った雲平は、一つの時代を終えたのである。

3) 教育者としての雲平

1871年（明治4年）雲平は長男亨に家督を譲り隠居して恭吉から雲平へと名を改めた。朱子学を人生の道しるべとし、学者、教育者として晩年の人生をかけた。久敬舎、観海講堂において教鞭をとった雲平52歳から78歳までの26年間には雲平が新時代の基礎を築く世に身を呈した集積がみられる。

(1) 久敬舎の開講

1873年（明治6年）7月、雲平52歳時、灘地方の有力者、大庄屋置塩庄蔵、松原八幡神社総代会代表、松原村庄屋内海傳次郎、同村組頭炭本駒次郎らによる再三にわたる招聘に応じ、第二の人生を松原の地において教育に

打ち込むことを決心した。

松原八幡神社の祠官として松原に居を構え、宮庁に神社の古記録、宝物、什器などの調査書を作成し提出しながら、同神社の境内地に「久敬舎」という書院を開いて学問を教えた。久敬舎とは論語の一節「子曰く晏平仲、善與人交久而敬之」、すなわち人と人との交わりは敬いを以って貴とする。お互いに尊敬しあって礼を欠かぬようとの教えから取った名称である。

(2) 観海講堂の開講

この11年後、1884年（明治17年）には、門人が多くなったため、講堂の並びに塾舎を建築、名称も観海講堂と改め、昌平黌に学んだ教育を実践した。観海講堂の名は頼山陽の『孟子評点』「海ヲ観ルモノハ、大水ヲ知ル。故ニ之ヲ説クニ、小水ヲ以テシ難シ、聖人ノ門ニ遊ブモノハ大道ヲ聞ク、故ニ之ヲ説クニ、小道ヲ以テシ難シ」に由来する。

観海講堂開堂時には新たに塾則を改正し、教育目標を4つの柱で示した。第一の柱は学問への真摯な姿勢「発奮しては食をわすれ、楽しんで憂いをわすれ、老いの将に至らんとするを知らず」、第二の柱は正義を行動で示すことを重視する「朱子学」、第三の柱は人間性の涵養を目的とした「文林・詩壇に遊ぶ」、第四の柱は「国家、社会のために尽くす（国爾忘家）」であったⁱ。

第三の柱とした「文林・詩壇に遊ぶ」は禁欲的で四書五経のみを熟読せよとした朱子学とは異なる視点である。朱子学に限定しなかったのは、理想だけでは物事は円滑に進まない、人間には幅が必要で、質を保った柔軟な思考が人を救い、国を救うと考えていた所以であろう。雲平は朱子学を柱としながらも、青年や子供とともに詩を吟じ散策を楽しむなど一弛一張の教育を実践した。そして何よりも、教育の根幹にあったのは「国家一旦の用

に役立つ人材」の養成一私を忘れ公のために尽くす人材の育成であった。これは雲平が生涯を持って示した哲学でもある。この理念の下、輩出された弟子には、維新後の日本の礎を築いた人物が多い。

(3) 人材の育成

観海講堂が世に知られ、かつて昌平黌で学んだ学友や全国の学者なども訪れた。雲平を慕って教を請う者が列をなし、門弟は3000人を下らないといわれた。

雲平は明治政府に教導職（一般国民の教化を目的として、明治5年（1872）に教部省におかれた職）ⁱⁱに任命され、各地の研修会などに講師として出講する事が多くなったため、金井利信（後の姫路師範学校の教授）を教授とし、その他5人の助教授を任命して観海講堂の運営を任せた。雲平はエリート層の育成だけではなく市井の民にも惜しげなくその知を共有しようとしたのであった。

高弟の一人である吉田豊吉は、観海講堂で学び、卒業後松原村で商業を営み、村を支えた。子息、吉田豊信は内務省諸官を経て兵庫県出納長、姫路市長となった。学生時代は勉強部屋に亀山雲平の書を掲げ、この書を見ては奮起したとのことである。

白浜聖人と讃えられた岡田重成は、白浜小学校の首席で後に栗生小学校の教員となり、松原村役場に勤務した。重成の次男である岡田武彦は九州大学名誉教授で日本有数の大儒学者であり、中国研究の孔子、王陽明分野における世界的権威である。

現姫路市飾磨区都倉の中島久吉は地域の要職を歴任し、大正12年には都倉特定郵便局長となり地域の政治・経済に寄与した。また、漢詩や水墨画に造詣が深く白鷺吟舎を主宰するなど文化面においても地域に貢献したⁱⁱⁱ。久吉の弟である正蔵は雲平の下で漢学を修めた後、第十連姫路屯営に入り中尉に昇進。そ

の後、飾磨郡第三高等小学校で教職に就いたが日露戦争勃発後、第十連隊に復入し最前線で隊を率い奮進、大尉・正七位を叙された。現在も中島家の座敷には明治26年雲平による書と明治30年の雲平からの書簡が掲げられている。若い二人が雲平の書に奮起し精進したことは想像に難くない。

数例を挙げたにすぎないが、門弟はそれぞれ場で「國家一旦の用に役立つ人材」となり、現在の日本の礎を築いたのである。

(4) 地域の紐帯と活性化

①灘のけんか祭りの隆盛

雲平の功績で忘れてはならないのが灘のけんか祭りの隆盛である。灘のけんか祭りとは、姫路市白浜町の松原八幡神社で行われる松原八幡神社の秋季例祭の俗称である。全国の数ある「けんか祭り」の中でも最大規模の祭りで、戦前から天下の奇祭、播磨を代表する祭りとして知られていた。戦後は、この神輿練りのほか、絢爛たる屋台を盛大に練り競う勇壮豪華な屋台練りが人気を呼び、国内はもとより海外にまでその名を知られるようになっている。雲平は1873年7月に松原八幡神社初代宮司となってから宮司の職務を遂行しながら灘祭りを氏子主催の神事として根付かせ祭りを発展させたのであった。

②新田開発の遂行

当時、松原・八家では、数十町の新田開発を行っていたが莫大な資金が必要となり、完成も危ぶまれていた。しかし、結果的には雲平の門人らによる資金提供により完遂させることができた。学問のある場には志のあるものが集う。その志を一にせんと思う者達が集結することで文化・経済が発展していったのである。これも雲平の功績といえよう。

以上のように、雲平は地域の紐帯強化と活性化にも尽力した。

3. 雲平の人柄

雲平は1899年（明治32年）、78歳で波乱に満ちた生涯を終えたが、人々は亡き父母を弔うようにその死を悼み、郷葬の礼をもって姫路景福山の先墓の中に葬った。旧藩主酒井忠惇もまたその死を悼み、金若干円を贈っている。雲平の人柄を(1)節宇亀山先生遺蹟之碑、(2)節宇亀山先生墓碑銘より検証したい。

(1) 節宇亀山先生遺蹟之碑より

雲平は生前、自身を顕彰する記念碑のような建立物は不要と語っていたが、その死後16年を経た1915年（大正4年）に節宇亀山先生遺蹟之碑が建立された。高弟であった金井利信は、「其恩実にとらちねの君にも劣らざるなり。嗚呼此の恩何を以て報ゆるを知る。況んや此の洪大なる恩徳をや。（後略）」と雲平への思いを表している。その他門人たちも雲平への畏敬と謝恩を節宇亀山先生遺蹟之碑の建立という形で結集したのである。

以下、節宇亀山先生遺蹟之碑から雲平の人柄が刻されている箇所を現代語訳を記す。

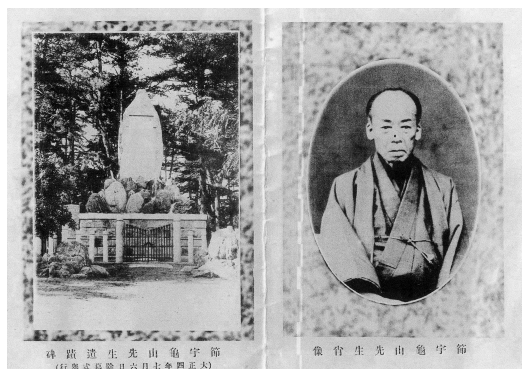
先生の生来の資質は、親兄弟によく仕え、人には恭しくへりくだっていた。愛すべきであって、侮ることはできない。その教えは徳行によって率先するものであった。その結果人々はみな香りがうつるかのように穏やかに先生の感化を受け、先生を播磨の聖人と称した。（中略）また徳行によって人を導いた。人々は（先生を）聖人と称した。そして、先生が山水とこのように釣り合っていたことは、近時の丈山・藤樹と言うことができる。（中略）

銘に言う。節は青松より堅く、心は白砂より清い。先生は懸命に努めて徳を修めたのである。先生を尽きることなく懐かしく

思う。朝には、先生の残された手本を恭しく上にいただき、夕べには、先生の残されたきまりを忠実に守る。永遠に先生は死なない。私たちの心の中に永遠に生き続けている。

碑から雲平の人柄と、雲平を追慕する門人の雲平への敬意が伝わる。碑文には「徳行人を化（みちび）き」「徳行を以て率先す」「自ら徳を修むるに非ず」と、徳という言葉が頻出している。徳とは善き行いをする性格、品性であり人に感化を与える人格の力である。私利私欲に打ち勝ち、常に公を考え、いかなる環境でも恭・寛・信・敏・恵の五つを行い、慈愛、知識、誠実、正直さ、勇氣、剛毅を備えていた雲平を称えているのである。仕官せず自らの節操を守り続け、教育者として人生の後半を生き抜いた雲平は徳行により人を導いた「徳の人」であった。

近代文明に圧倒され、伝統的価値観が変容した時代にあって、さらに死後16年も経て、弟子により節宇亀山先生遺蹟之碑が建立されたということは大変な驚きであり、言語に表しがたい深い信頼・敬愛の情を感じることができる。碑を前にすると雲平を永遠に師と仰ぐ弟子の思いが万感胸に迫る。



(写真1) 「節宇亀山先生遺蹟碑」
(大正四年七月六日 除幕式舉行) とある

(2) 節宇亀山先生墓碑銘より

姫路端松山景福寺にある雲平の墓碑銘に刻されている人柄の現代語訳を記す。

国家は日々に開明へと向かっているが、人情は月々に軽薄へ流れている。しかし、君子たるものは我が節宇翁のようであることを謹んで願う。(中略)

翁は人となりが目秀麗で外(人)には恭しくへりくだり、内(自分)には厳格であった。諸職を歴任した。(何事にも)公を考え、私を忘れるように一生懸命労力を尽くした。家人には賓客のように対し、門人には朋友のように接した。一身を奉じて節約に努め、貧しい者に金品を恵み与えた。松原におよそ二十年間居た。その徳を仰ぎ慕ってやって来る者は、一日中後を絶たなかった。翁はいつも食事中でも口の中のを吐き出してすぐに出迎えた。人は称して播磨の聖人と言ったという。(中略)

銘に言う、学に勉め徳を養い、職を奉じて我が身を忘れる。謙虚に人に接し、真面目に励んで己を治めた。その行いは厳格で、その言葉は穏やかであった。弟子は翁の人となりを手本とし、風俗は人情が厚い状態に戻った。翁は君子たる人であるのか。まことに君子たる人である。

銘文は「君子たる人である。」と結んでいる。孔子は、君子の片鱗として「重大事に望んでも節を曲げる事のない人、道が会得されないのを憂えてけっして貧乏を憂えない人、自分を磨き世のため人のために役立つ学びをする人、道義を本とし、礼によって行い、へりくだって物を言い、まことによってことを成し遂げる人」を挙げているがまさしく雲平の人物そのものといえるであろう。

雲平は「国爾忘家」を座右の銘として、藩

士として学者として教育者として私を忘れ、公のために尽くした。そして大儒学者でありながら、芸人などの熟練した技を見ては、いつも自分の浅学を恥じ、常に自分に厳しく道を求めていた。

先述した中島久吉が保管していた雲平からの書簡や葉書にも雲平の謙虚で丁寧な人柄が表れている。当時久吉は17歳から22歳であり、雲平は70を越えた師であった。しかし、文面は若い弟子へのものへとは思えないほど丁寧かつ情愛あふれるものであった。その他、買い手より値のことを言うべきではないと掛け値で買い取り、売り手が猛省しその後、実直な商売をしたという逸話や、門下生の過ちを叱責するのではなく身をもって教授したなどその人となりを知れる逸話が多い。

4. 雲平を顕彰する今日的意義

以上、雲平の人生を3つの時代に区分してその業績と人柄に迫った。雲平の一生は、国を思い、人を思い、郷土に尽くしたものであった。

第一の修学時代も我が出世のための学問ではなく、国を、人を支えるための学びとして位置付けていた。この時期の修学がその後、大目付時代の藩の苦難を切り抜ける素地となり、播磨聖人といわれる素地となった。

第二の姫路藩大目付の時期には時流に流されることなく事を冷静に見極め、命を賭して主君・藩士・領民を守った。

その後職を辞してからの第三の時代には官吏の道を歩むことなく松原で一教育者として修学と実践で貫き、その成果を次世代の若者に託した。地域の人々を連帯させ地域の活性化を図るため祭りの隆盛にも寄与し、その人柄を慕い集まってくる志士の尽力もあり村の経済発展をも可能とした。

公のために生き抜いた雲平の生き方からその高潔さ、誠実さ、忠誠心、節操など、現在、失われつつある多くのものを学ぶことができる。

雲平を通じて郷土の文化や歴史を学び、その大きな流れの中に生きる自分を発見することは、郷土に誇りを持つだけでなく、脈々と繋がる命を拝受しているという命に対する畏敬の念を抱かせ、社会に於ける個の生き方を問い直すことにもなる。

検証した節宇亀山先生遺蹟之碑や節宇亀山先生墓碑銘には、「徳行を以て率先す」「徳を養い」とあるが、「徳」は今や死語といっても過言ではないだろう。しかし、人としていかにあるべきかを考えるとき、「徳」すなわち知を重んじながら常に公を考え、慈愛、誠実、剛毅を備えるあり方は中核に据えるべき事項であると考えられる。私たちは今一度、「徳」について考えることを課せられているのではないだろうか。

また、遺蹟之碑には、「尽きることなく懐かしく思う、…永遠に先生は死なない。私たちの心の中に永遠に生き続けている」とある。ひっそりと佇む碑であるが、門人の雲平への変わらぬ感謝の思い、そして両者に培われた深い信頼と敬愛の心に、時を越えた感動がある。

雲平の人生を通じて私たちは、人として生き方、在り方について時代を越えて考え学ぶことができる。

おわりに

この度（平成26年8月）、雲平を顕彰するため、節宇亀山先生遺蹟之碑の建立後99年を経て、松原神社の氏子の方々により節宇亀山先生遺蹟之碑の現代語訳の銘版が建立された。節宇亀山先生遺蹟之碑は漢文で書かれて

おり難解であったがこの銘版設置により雲平の認知度が高まり、郷土の偉人への敬愛や歴史への関心を深めることが期待される。

今後も雲平顕彰活動を展開し、日本人の生き方の再考、顕彰につなげていきたい。

6) 中島友子, 中嶋裕子: 節宇亀山先生墓碑銘に関する一考察－墓碑銘から読む亀山雲平の業績と人柄－, 近畿医療福祉大学紀要 No.10(2), 49-66, 2009.

7) 藤原龍雄: 姫路城開城. 神戸新聞総合出版センター, 2009.

【註】

- i ある人物が、当時人気のあった蘭学や算術を教科に加えてはどうかと進言したところ、言下に「私が教えている限り、漢学一本でいく。」と言いきったとの逸話からも、物事の根本となる正しい心、人や物を愛し尊ぶ心、精神性を第一義としていた教育観が伝わる。
- ii 神宮や僧侶がその任にあたった。この職は明治17年に廃止された。
- iii 筆者中島友子の祖父、中嶋裕子の曾祖父にあたる。

【参考文献】

- 1) 長野 哲発行、亀山雲平顕彰会編集: 亀山雲平顕彰会『青松白砂』(1-7号) 1990-1996.
<http://nagano2751.wordpress.com>
- 2) 宮脇武義: 播磨聖人 姫路三山亀山雲平, 八木地区地域夢プラン事業, 2013.
- 3) 中嶋裕子: 高齢者の生涯教育－亀山雲平を学ぶ－. 教育学研究紀要, No.52(1), 222-227, 2006.
- 4) 中嶋裕子, 中島友子: 郷土史の考察－播磨史と亀山雲平の生涯－. 近畿福祉大学紀要, No.8(1), 25-36, 2007.
- 5) 中嶋裕子, 中島友子: 播磨聖人 亀山雲平－節宇亀山先生遺蹟之碑にみる雲平の思想と人柄. 近畿医療福祉大学紀要, No.9(1), 11-23, 2008.

